

<今朝の聖書から>

村上定幸

【なぞかけ?】“パンをください”という願いと、“パンである(35節)”という、なぞなぞのような会話から始まります。28節の“神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか”という、素朴な問いの続きに出てきます。そこで主は“神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である(29節)”と結論を語られます。このことが“神の業を行うこと”なのです。そこで弟子は“どんなしるしを行ってくださいますか”と、確認するように聞きます。“あなたが神の御子である証拠を見せてくだされば信じましょう”というわけです。よく分かります。6:31には“天からのパンを彼らに与えて食べさせた”と、出エジプトの出来事を主は語られます。ちょっとはつきりなくなっていましたら出エジプト記16章に、この経緯が記録されていますので開いてみましょう。そのように“はつきりしておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである(32-33)”と仰るのです。

【命のパン】ここで、神様を“私の父”と言うので、“そのパンを私にもください”——そうしたら、私たちが神の業を行うようになるでしょう——とお願いすることになります。そのことの主の説明が35節の“わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない”というものです。パンは主食、命を永らえる糧の象徴です。実際、出エジプトを成し遂げたイスラエルの人々は、普通なら、今考えてもそうですが、生きていけない荒野の中で、このマンナと呼ばれたウエハースによって、生かされたのです。

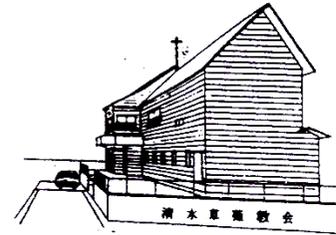
【パンは毎日のエネルギーまた祝福】聖書では文字通りアルトン(ギリシャ語でパン)という言葉が用いられていますが、このパンは“主の祈り”の日毎の“糧”と日本語に訳されている言葉と同じです。要するに、エネルギーを失って砂漠の中を彷徨うように生きる人々に“回復の命をもたらそう”と言っておられるのです。

【復活という回復】39,40節に2回、結論が語られます。“父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである”と語られます。

【私の復活】主イエスが、復活された(と書いている)ことは、信じている(というよりは、知っている)。こんな姿が、私たちの信仰に落ち込んでしまうことがあるようです。“本当は私のことなのに”です。パウロは“復活がなければ、私たちの宣べ伝える福音はむなし(1コリ15:14)”と、このことを語っています。

週報

2011年 5月 15日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリースタジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042